

特別活動研究部

1 研究テーマ

「明るい未来を切り拓く子どもを育てる学級活動の在り方」
 ～ 育成を目指す資質・能力に応じた、合意形成に向かう話し合い活動のプロセスとは ～

2 研究内容について

学級活動の話し合い活動に着目し、合意形成に向けた話し合いのプロセスについて研究を進めていく。
 話し合い活動において、育成を目指す資質・能力に応じた合意形成に向かう話し合いのプロセスを探ることを研究の目的とする。話し合いのプロセスを学級の実態（発達段階・時期・学級会の経験など）や活動内容、子どもに育てたい資質・能力によって教師が事前に想定し、実践を通して実際にどうだったのかを検証していく。実践提案、授業研究会等を通して分析・整理していく。

3 研究方法

- (1)市内全小学校から研究会員を募集する。会員は低学年部会、中学年部会、高学年部会のいずれかに所属し、研究を進める。
- (2)原則として月1回の研究会を開催する。基本的には部会で研究を進め、必要に応じて全体会を行う。
- (3)研究主題に沿った提案資料をもとに研究協議する。授業研究会では、研究授業をもとに研究協議を行う。また、部会ごとに助言者を依頼し、指導を仰ぐ。
- (4)講演会を通して研究を深めるとともに、特別活動の指導について研修する。
- (5)研究大会では各区の研究を基に研究協議し、特別活動における指導力を高める。
- (6)各部会に研究推進委員を選出し、研究会の運営・推進、研究内容の分析やまとめ、研究紀要の作成等を行う。
- (7)毎月の研究会と並行し、主に経験年数が3年までの会員を対象に役員による「フレッシュ講座」を開催する（16:00～16:45）。

4 年間活動報告

日程	内 容	研究会のもち方
4	研究テーマ・研究内容承認 役員承認 会計報告・予算承認	紙面総会
5/12	研究計画提案 フレッシュ講座オリエンテーション 講演会	Zoom 全体会
6/16	基調提案	Zoom 全体会
7/7	課題別研修会 区連絡会①	Zoom 低・中・高・調査部会
8/25	講演会	Zoom 全体会
9/8	実践提案① フレッシュ講座①	Zoom 低・中・高部会
10/6	講演会	Zoom 全体会
11/10	実践提案②③ フレッシュ講座②	GoogleMeet 低・中・高部会
12/1	授業研究会（低1・中1・高1 計3 授業公開）	ハイブリッド開催
1/12	実践提案④ フレッシュ講座③	低・中・高部会
2/9	※第二次教育研究大会（戸塚区・栄区） 区連絡会②	GoogleMeet 全体会
	【戸塚区研究主題】「よりよい人間関係を築く学級活動をめざして」 ～「学級目標」を意識した活動づくり～ 【栄区研究主題】「よりよい人間関係を築く学級活動をめざして」 ～主体的な話し合い活動の在り方～	
3/9	研究のまとめ	GoogleMeet 全体会

5 成果と課題

研究会では、話し合い活動において、育成を目指す資質能力に応じた、合意形成に向かう話し合い活動のプロセスを探り、教師の支援の検証や分析を行った。

昨年度までの研究に加え、合意形成に向かう子どもの姿や話し合いの流れを分析し、教師の支援の種類や指導のポイントについても明らかになった。

〈教師の支援について〉

低学年	中学年	高学年
<ul style="list-style-type: none"> ○問い返し →意見の内容・理由の確認 ○意見の全体化を図る助言 ○イメージの共有化を図る助言→実際に試す ○一人一人の意見を大切にできる意識をもたせる 	<ul style="list-style-type: none"> ○問い返し →意見についての思いを聞き出す ○抽象と具体の整理 ○小グループで話し合う ○イメージの共有化を図る助言 →実際に試す 	<ul style="list-style-type: none"> ○問い返し →意見の背景にある思いや経験を聞き出す ○意見の背景や思いを理解する助言 ○活動の意義を考える助言

〈合意形成のポイントについて〉

低学年	中学年	高学年
<ul style="list-style-type: none"> ○原案のよさを確認する ○不安を解消する ○提案者の思いを確認する ○友達の意見を受け入れる 	<ul style="list-style-type: none"> ○めあてに沿っているか考える ○提案者の思いを確認する ○友達の意見と比べ合う ○友達の意見のよさを生かす 	<ul style="list-style-type: none"> ○条件に合っているか考える ○相手の立場や考え方を理解する ○意見を組み合わせる ○意見のよいところを取り入れ、新たな考えを生み出す ○活動の意義を考える

一方で、今年度もこのコロナ禍の中、大変に難しい研究会運営となった。とりわけ特別活動では、子ども同士のかかわりを前提とする教育活動であることから、実践すること自体が手さぐりの一年間だった。そこで「コロナの中で特活ができるのか」という多くの会員の問いに答えるべく、7月には課題別研修会を行った。多くの会員の参加があり、ニーズの高さを感じた。それと同時にZoom無料アカウントによる人数制限に対する懸念があったが、今回は100人を超えなかったため、進行が滞るなどの問題は生じなかった。

その後の講演会や実践提案を内容とした研究会にも多数の会員の参加があった。むしろコロナ禍だからこそ特別活動の意義を再認識し、勉強したい、研究を進めたいという思いが高まったと言える。それは9月以降の実践提案でも同様であり、各提案者がそのときどきだからこそできる実践に心を砕き、それをもとに協議を深めることができた。10月の研究会では、実践提案を予定していたが緊急事態宣言が発令されている中での授業実践が難しいことから内容を変更して、「横浜式学級会の特徴」についての講演会を行った。過去の先輩方が研究されてきた歴史を再確認し、活動を重視し活動の中から生まれてくる問題に対して議題を設定し「原案」を用いた学級会を行ってきているよさを感じることができた。

授業研究会（12月）では、リアルタイムの授業を参観できることを大切にしようと考え、ハイブリッド開催とした。当該教室には記録者のみの最小限の委員等が入るように工夫した。映像が途切れることなくクリアに見ることができたが、子どもの声は聞きづらいときがあった。撮影やチャットの管理のために運営側の人数が多く必要であることや協議会での発言が少なく、なかなか内容が深まらないなどの運営面の課題もあった。

第2次教育研究大会（2月）では、戸塚区、栄区研究会による研究発表を行った。Googlemeetの活用にも慣れてきたので発表は問題なく実施することができた。くり返しになるが、今年度は運営面での難しさを痛感するとともに、学校教育で果たす特別活動の意義を再認識した一年だった。もっとも来年度も引き続き同様の研究会運営が予想される。研究会組織間のさらなる情報共有なども一層大切になると考えている。